フレッチャー氏について

上野生

前號私の論文の中に、フレツチヤー並にフレツチヤリズムについて書いておいたが、一體フレツチヤーといふ人はどういふ人であるか、氏を目して榮養學者のやうに思つてゐる人もあるが、その實は實業家であつた。尤も學者を愛好した人で、そして自分も相當の學者であつたが、サンフランシスコに一番館、シカゴに二番館といふ商店を有し、日本の雜貨を輸入販賣してゐた。この頃日本より竹細工、刺繍、肖像を絹に畫く人、屏風の製造人等を連れて來てゐたが、彼等には商品の說明を英文で記する事が出來ないので、適當な敎育ある日本人があれば紹介して貰ひたいと、當時の紐育領事故高橋新吉氏（其後勸業銀行の總裁となつた人）に依頼した。

當時東京高商を卒業した堀越善重郎氏、今の堀越商會主は絹物貿易の研究を目的として明治十七年八月一日橫濱を離れて、同月末ニューヨークの人となつたが、當時の氏は旅費に乏しく、少からぬ辛勞を重ねたさうであるが、丁度高橋氏の紹介で、フレツチヤーの二番館に入店することゝなつた。

フレツチヤーの二番館で働いてゐる間に、同市で小さな雜貨店を出してゐたメーソンといふ男が屢々同市を訪ねて來、互に話す間に何時しか懇意となつた。

足利の絹織物商木村半兵衞氏は早くより絹織物輸出の計畫を樹て、堀越氏に學費を補助し、卒業後はこの方面に活動させる積であつたが、當時木村氏の事業振はず、輸出の計畫も意の如く運ばなかつた。併し堀越氏が渡米するとに決した時、その旅費は氏の援助に成つたのであつた。從てフレツチヤーの店にゐても時々流行絹物の見本に基き木村氏より十八年の春に四五千圓ばかりの絹半巾を送つ

ラッド博士夫妻（一九一九年四月二十日博士邸後庭にて大島直治氏撮影）

て來た。

手巾は來たが、當時の堀越氏には稅金を拂うて之を引取る資力もない、又二番館にゐるので引き取つたとしても之を始末することも出來ない。如何したものかと當惑してゐた時想ひ起したのはメーソンのことで、一日彼の來訪した時事情を話しインヴォイスの原價さへ先方に送れば宜いのだが、處分して呉れないかと相談すると、彼は宜しい、引受けやうと乘氣になつたので、送狀に署名して彼に渡した。併し彼は單に時々面會しただけで、その店の資產の多少など全く明でない。果して代價を拂つて呉れるや否や懸念に堪へぬので、その夜はまんじりともしなかつた。

是より先氏は日本人と印度人とは同一人種であらうと云ふ論文を起草し、教授某――フレッチャーは自分が學者であつたから、店員中にもプロフエッサーの肩書を有する者を雇つてゐたのである――に訂正して貰ひ、シカゴ・タイムスと云ふ新聞に投書した。これが非常な評判となつて桑港の新聞は全文を電報で取寄せ掲載した。

フレッチャー氏は仕入れと觀光とを兼ねて日本に來遊

する爲に桑港に來てゐたが、この新聞を見て執筆者が堀越氏なるを知り、直に支配人に電報で堀越といふ男は感心な學者である。充分に優待して逃さないやうにして呉れと命令して來た。支配人よりは直に堀越氏を呼んで君の月給を增さうと思ふが、希望はないかと聞く。自分は商業を見習に來てゐるので月給など增して貰ふ必要はない、その代り何時歸らねばならぬかも知れぬといふ。

實は主人から君の給料を增せと命令して來たのである。主人は今大平洋を航行中であるから、君が受けて呉れなくては私が困る。では今までの倍額にするが、それで宜いかといふ。結構ですといふので、氏は一論文によりて俸給を增加された。當時の俸給は一週六弗外に室を與へられたので、約十弗に當つてゐたが、週給を十二弗に引上げられたのである。

以上は堀越氏とフレッチャー氏とにからまる一挿話であるが、フレッチャー氏とはどんな人であるかについて知る便りにもならうかと思つて、雜誌から要領を轉載することにした。

本壘打王ベーブ・ルースの精神檢査

コロンビヤ大學のアルバート・ジョンソン、ジョセフ・ホームス兩教授は同大學心理學教室實驗室で本壘打王ベーブ・ルースの生理的及心理的實驗を行ひ、其結果を發表した。夫に依るとルースは普通人よりも聽覺が十二パーセント、神經は十パーセント銳敏で、動作に對する判斷も普通より十パーセント方精確に働く。實驗は三時間で終つたが、實驗室では彼は送電中の電線が水平に引張られた機械の前に起ち、推理實驗板の上に垂直に吊るされた野球用球（四オンス四分の一）を、重量五十四オンスのバット（彼の平素使用するもの）で打つた所、バットを握る早さは一秒百十吠で、打つたボールの速力は一秒六十吠であつた、ボールのバットに當る所は尖端から四吋の所が適當である、次に能率試驗を行ひ教授は先づ各隅々に小さな丸い孔のある三角盤――そして其各々の孔の底には電流が通じてあつて、夫に觸れると直ぐ記錄される樣になつて居る機械を持出した。ルースは命ぜられた通り、一分間連續的に其孔の中に片手宛出入した所右手は百廿二回左手は百卅二回を示した。（普通の人は八十二の平均）次に暗室で視覺試驗を行つたが、一秒の千分の百六十の光線に反應があり（普通人は千分の百八十）音波に對しては一秒の千分の百四十に反應があつた（普通人は千分の百五十）之に依つて判斷すると、投手がルースの打撃を封ずる爲には、普通人に投球するよりも一秒の千分の廿だけ早い速力で投球せねばならぬ、此の實驗はルースが昨年のレコードであつた五十四本目の本壘打を飛ばした後で行はれたものである。